

それでは**第一ヨハネ 1 章**をお開き下さい。前回**ヨハネの手紙第一**の序論を、イントロダクションを皆さんにはお伝えいたしました。この手紙を書いたヨハネはおそらく 90 代から 100 歳近かったと私は推測しております。多くの聖書学者たちは、このヨハネは**ヨハネの福音書**を書き、そして**第一・第二・第三**という **3 つの手紙**をエペソの教会に主に宛先として書き送り、それらの手紙は勿論回覧板のようにして各地の教会へも廻されたわけですが、そして最後に**黙示録**を書いたと言われております。しかしそれはあくまで推測であります。中には**ヨハネの福音書**が最後に書かれたのだと言う人もおりますし、また**ヨハネの手紙**のこの 3 つがヨハネの最後の作であると。パトモス島というところに島流しになって、そしてそこからヨハネは生還してきたわけですから、エペソの町で晩年を過ごしたと言われております。イエスの実の母マリヤを引き取って、そのエペソの町で晩年を過ごしたというのが、キリスト教の伝承の残すところでもあります。ですから、場合によっては**黙示録**が先に書かれて、その後この手紙が 3 つ。そして、もしかしたら同時期か、その前後かに**福音書**が書かれたのではないかというふうにも推測出来ます。いずれにしても、そうなりますとヨハネの作というのが、新約聖書の最後の作となります。新約聖書の最後を締めくくったのが、**ヨハネの手紙**か、**黙示録**か、**福音書**のどれかということになります。最後の書物ということになれば、それは最重要と見ても差し支えないと思います。新約聖書、又は聖書 66 巻の最後を締めくくったのが、ヨハネによる作であると。書物である、手紙であるということです。そのことも重要視する必要がありますかと思えます。100 歳になってヨハネはこれらの作を書いたんだと。少なくとも 90 代で書いたということでもあります。

で、先週も少しお話ししましたが、年老いたヨハネは長老と呼ばれて、最後の使徒です。すべての使徒たちは、既に殉教しておりました。ヨハネも沸騰する油釜の中に投げ込まれて殉教するはずだったんですけども、しかし主が奇跡的にヨハネを守られて、その後ヨハネはパトモス島に島流しになって**黙示録**、そしてこの **3 つの手紙**、または**福音書**をその後に記したというふうに言われております。明らかに主は目的を持ってヨハネを敢えて生き長らえさせた。他の人たちとは違って、殉教せずに、勿論最終的には 100 歳を超えたかしてヨハネはこの世を去るんですけども、それも 1 つの殉教といえれば殉教なんですけど、いわゆる処刑による死を免れて、ヨハネは誰よりも長く生きて、そして最後の使徒として主から最も大切なメッセージを託されて、それを高齢になっても語り続けたということです。各地の教会でも彼はもてはやされたと思えます。最後の生き残りの人です。ラストサムライならぬ、ラスト使徒、ラスト apostle ということですけども、その都度その都度ヨハネはショートメッセージをいたしました。ショートメッセージといっても一言です。「子供たちよ、幼子たちよ。あなた方は互いに愛し合いなさい。」素晴らしいメッセージです。で、まだ続きがあるかと思ったら、それで終わって講壇から降りてしまったと言われております。それこそがまさにヨハネが最も伝えたかったメッセージあります。「そんなショートメッセージで終わってくれたらどんなにいいのに。」と皆さん思っているかもしれませんが。それは私が 100 歳ぐらいになったら期待してもいいと思えますが。(笑) そんなヨハネのことを人は『**愛の使徒**』と呼んでいたわけですから。ヨハネの**福音書**の中でもヨハネは、自分が作者であることを明かさずに、敢えて『**イエスに愛された弟子**』と自称していたわけですから。勿論自称と言っても、鼻高々に、鼻にかけて天狗になってそう言ったのではありません。「私は他の誰よりも特別扱いされた使徒の 1 人である。」と言ったわけではなくて、むしろ「私のような者でもイエスに愛されたのだ。」と。「私のような愛しにくい、愛される資格のないこんな者でも、イエスに愛された弟子とされたんだ。」と。それがヨハネの言わんとしたこと。自分が十二

使徒の中でも最も優れた者としてイエスに愛されたんだ。」ということを書いたかったんじゃないんです。私のような者でも愛して下さるのが、私たちの主、イエス・キリストであります。ヨハネは、確かに晩年は『愛の使徒』と呼ばれたんですが、若い頃はそうではありませんでした。むしろヨハネは、生来短気で、決して愛に満ち溢れる人ではなくて、非寛容的な人物です。『愛は寛容であり』と**第一コリント 13 章**にあります。まさにヨハネは寛容ではない人物でした。そういったエピソードは福音書の中にも見ることが出来ます。イエスがヨハネにつけたあだ名は『雷の子 (ボアネルゲ)』でありました。『雷の子』というのは、兄のヤコブとともに「この兄弟は雷の子である。ボアネルゲである。」なぜならば、雷のように激しやすい激しい性格である。非寛容的な人物であるということで、例えば、**マルコの福音書 3:17**。同じく**マルコ 9:38**。ヨハネという人物は生来、生まれつきの性格ですけれども、実に短気であった。『雷の子』と言われるほどに激しやすい人物で、サマリヤの町でイエス・キリストの事を受け入れなかったそんな時には、ヨハネはイエスに対して「主よ、天から火を下して彼らを焼き殺しましょうか。」そういったとんでもない発言をしていたわけです。そんな彼がイエスと出会って、イエスと共に歩んで変えられたんです。生来の短気な性格が、イエスに出会って、イエスと共に歩むようになってから、段階的にはありませんけれども徐々に変えられていったんです。そのことに私は希望を覚えております。「この性格は変わらない。昔から変わらない。生まれつきだから。この両親に、このお爺さんお婆さんに育てられたからとか。うちの家系は生来短気な家系なんですとか。すぐにカッと来る、すぐに激しやすい、怒鳴り散らす、そういう家系なんです。だからこれはもう変わらないんです。」と。そんなことはありません。ヨハネもかつては『雷の子 (ボアネルゲ)』と呼ばれておりましたけれども、晩年は『愛の使徒』と呼ばれるまでに彼は愛に満ち溢れた使徒として成長したわけです。変えられたわけです。イエス・キリストと一緒にいる間に、変化が生じたわけです。「性格というものは変わらない。」と思わないで下さい。性格は変わるんです。「この人の性格は絶対に変わらない。」と勝手に信じ込まないで下さい。それはイエス・キリストを知らないから、そう言うんです。イエス・キリストには不可能な事は 1 つもありません。短気な私も変えられました。皆さんも変えられると思います。「この性格だけは。」嘆かないで下さい。諦めないで下さい。イエス・キリストと一緒に時間を過ごすことが鍵です。イエスと四六時中一緒に時間を過ごすことによって、このイエス・キリストから感化を受けます。よく夫婦が似た者夫婦と言われるのは、夫婦が時間を一緒に過ごすからです。良い意味でも、悪い意味でも。夫婦は、似た者夫婦になるのは、これは避けられないことです。同じ屋根の下で誰よりも一緒に時間を過ごせば、当然のことながらお互いに感化し合う、影響し合うわけです。良い影響がお互いに及べば幸いですけれども。イエス・キリストと私たちが一緒に時間を過ごせば、イエス・キリストから影響を受けます。私たちの悪い影響はイエスには一切及びません。幸いなことです。私たちがイエスと将来は結ばれる者ですけれども、今既に私たちは婚約関係にあります。既にイエス・キリストと結ばれた者としてみなされております。イエスと時間を過ごせば過ごすほど、寝食を共にすれば必ずイエスの影響を受けます。それは絶対的な影響力であります。これまで数え切れないほどの人たちがこのイエスに出会って変えられてきたわけです。変えられない人は 1 人もいません。例外は 1 人もいないということ。ですからヨハネはそのことをまず実体験したわけです。「自分がイエスと出会ってこんなにも変えられた。かつて雷の子、短気で仕方がなかった、気性の激しい荒いこの自分が、またこんな自分でもイエスに愛されたんだ。そしてイエスにこんなにも長く用いて頂けたんだ。」と。そのヨハネの証しの手紙が、**ヨハネの手紙第一・第二・第三**であると言って良いかと思えます。

そして今から **1 章 1 節**から見て参りますけれども、この手紙はアウトラインで 3 つのセクションに分割されます。英語で言うキーワードを 3 つそこに充てたいと思います。まず第一セクションは、**1~2 章**です。それは『**神の光**』light。神の光を体験する、経験するということです。で、**3~4 章**が第二セクションです。それは『**神の愛**』を体験する、又は経験する。英語で言えば love。で、第 3 セクションが残している **5 章**

です。それは『**神の命**』を体験する、経験するという内容です。英語で言えば一言で **life**。英語で 3 つの単語を挙げました。全部 **L** で始まっています。第 1 セクションが 1~2 章で **light**。光です。第 2 セクションは 3~4 章にかけて **love**。愛です。で、第 3 セクションが 5 章で一言で英語では **life**。命です。神の光を経験する。神の愛を経験する。神の命を経験する。経験的に神の光、神の愛、神の命を知ることがこの**ヨハネの手紙第一**のテーマであります。ですから、“知る”とか“分かる”という言葉が多用されていることにも皆さんお気づきになってきているかと思います。先週第一ヨハネを 5 回読んできて下さいと言いました。忠実に読まれた方は気付いたかと思います。“知る”だとか“分かる”という言葉がやたらめったら、その動詞がよく使われているなどお気づきになった方があられるかと思いますが、それが 1 つのキーワードであります。知ること、分かるということ。特にその中で経験的に知るということを意識して頂きたいかと思います。頭で知るというよりも、体験して経験して知るというその知識です。情報として、又は神学として知る知識ではなくて、実体験を通して身に付けるという知識です。私の体験、あなたの体験としての知識です。そのような知り方がとても大切だということをこの手紙を通して教えられます。私たちは頭ではいっぱい知っています。「それは分かっています。それは知っています。それは読みました、学びました、聞きました。」でも、それをあなたは本当に知っているでしょうか。実際にあなたはその知った知識を実体験しているでしょうか。神の光、神の愛、神の命。神学的にはそれら 3 つをあなたは説明出来るかもしれません。でもそれをあなたは個人的に知っているでしょうか。日々の生活において本当に味わっているでしょうか。ヨハネという人物はまさにそれらを個人的に味わった人物としてこの手紙を書いているわけです。そのことが、まず **1 章 1 節**の冒頭の部分に見ることが出来ます。

今から **1~3 節**を通してお読みいたします。原文ではこれが 1 文となっています。ワン・センテンスとなっておりますので、長いですがけれども **1~3 節**まで。『¹初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、² —このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。— ³私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。』原文ではこの **1~3 節**が 1 文、ワン・センテンスとなっています。これらが**ヨハネの手紙**の総論と言っても良いかも知れません。サマリーです。ヨハネが実際に体験したこと、具体的には“いのちのことば”である、又永遠の命そのものであるイエス・キリストをヨハネは実際に味わったんだと。その方は勿論言うまでもないですがけれども、イエス・キリストというお方です。イエス・キリストこそがいのちのことば、生けることば、永遠の命そのものです。その方から直接聞いたんだ。その方を直接見たんだ。その方をじっと見つめて観察して、そして触った、触れたんだ。この部分は同じヨハネが書いた**福音書の 1 章**のやはり序文にも共通してみられる内容ですから、参考までに**ヨハネの福音書の 1 章**の部分と読み比べたいかと思います。ヨハネ **1:1**から読みたいかと思います。

『¹初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。²この方は、初めに神とともにおられた。³すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。⁴この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。⁵光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。』この序文と (**18 節**まで実は長く続いている序文ですがけれども)、**ヨハネの手紙第一**の **1~3 節**の序文。共通項が沢山見られるかと思いますが。“ことば”が使われています。他にも“光”、“いのち”といった言葉がやはり**ヨハネの手紙第一**の **1 章**にも多用されており、それらはただの概念、観念ではなくて、実体の伴うもの。実際に見ることも、触れることも出来る。そのようなものであると。実際にその“ことば”は人となったということも、**ヨハネの福音書 1:14**に書いてあります。

『ことばは人となった。』受肉されたことばです。そのイエス・キリストとの交わり、フェローシップです。
“コイノニア”とギリシャ語で言いますが、それは特に「共通のものを分かち合うこと。」共通のもの。イエス・キリストという共通のお方。イエス・キリストという永遠の命を共に持つ者が、共に分かち合う。それがクリスチャンの交わり、フェローシップであります。

もう一度テキストに戻って頂いて、ヨハネの手紙第一 1:3 の後半のところに『私たちの交わりとは（テ
ィータイムです、とは書いてありません。私たちの交わりとは茶話会ですとか、世間話ですとか、家庭の
中の不平不満を言い合う場所ですとか、一切書いてありません。私たちの交わりとは）、御父および御子イ
エス・キリストとの交わりです。』クリスチャンの交わりは、ゴシップ大会ではありません。趣味のサー
クルでもありません。クリスチャンの交わりは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。それが
永遠の命と言って良いと思います。永遠の命を生きるとは、御父および御子イエス・キリストと交わりを
持つということでもあります。永遠の命と言うと私たちは、とかく死んでからその後長々と生きることの
ように誤解している節があるかと思いますが、それとは全然違います。永遠の命は、霊的な命です。命
と聞くと肉的な命をすぐにイメージしますので、それに永遠がついてくると長い不老不死の命と思いがち
ですけれども、そうではありません。これは霊的な命です。質が、クオリティーが全く異なる命とい
うことです。肉の命とは全く比べようのないもの。ヨハネの福音書 17:3 にも目を留めて欲しいと思
います。

『その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリス
トとを知ることです。』永遠の命とは天国で与えられる命ではなくて、既にイエス・キリストを信じる者
には、この地上において与えられていて、そしてその命は常に味わえるんだということ。この永遠の命の
生き方を、この地上で既に私たちはスタート出来るんだ、ということがそこに書かれているんです。具体
的には、御父とイエス・キリストを知ること。又はその父と御子と交わりを持つということ。それがここ
で言われていることでもあります。それが救われた者の真の生き様であります。永遠の命を生きていないクリ
スチャンが、あまりにも多いと思います。すなわち御父と御子との交わりを持たずに、ただ肉の命だけ
を生きているだけのクリスチャンがあまりにも多いということです。折角イエス・キリストを信じること
によって永遠の命を頂いたのに、その永遠の命を無用の長物として、宝の持ち腐れのようにして、それはあ
たかも死んでからスタートする命かのように勘違いして、全く関心を持たない。その永遠の命を全然生
きていないクリスチャンが、あまりにも多いように私には思います。もったいない話です。ですから是非ヨ
ハネが、「そんなもったいないことをしてはいけません。」と。自分が体験したことを、本当にイエスと日々
時間を過ごして、会話をし、フェローシップを楽しんで、四六時中時間を過ごして、寝食も共にする。
そんな夢のような生活。それは私たちにも可能である。出来るんだということ。出来るのにしていないの
は、何とも言えない残念なことであります。それをクリスチャンにも強調したい反面、そのような教えを
真っ向から否定する異端的なグループに対しても、ヨハネはこの手紙を書きました。その異端的なグル
ープについては、前回も説明しましたが、それは既に二千年前から、初代教会時代から蔓延していた、
はびこっていた異端で、グノーシス主義と言います。“グノーシス”というのはギリシャ語の「知る」とい
う言葉から来ています。「知識」から来ています。ですからテモテの手紙にも「霊知」という言葉が使わ
れていましたけれども、それは“グノーシス”から来ている言葉です。異端のグノーシス、知識であります。

で、端的にそのグノーシスの考えを、教理を説明しますと、それは二元論からなっています。二元論
というのは、霊と物質。この二元があって、霊は全て善である、良いものである。その一方で物質は全て悪
である。この二元論です。霊的なものは全て良いもの、善であって、目に見える物的なもの、物質は、又
は肉体は、これは全て悪いもの。悪であると。そういう二極の考え、二元論をグノーシス主義は、自分
たちの特別な知識として伝えていたわけですから、そのようなグノーシス主義は、名前や姿を変えて現代
の二千年後のこの教会、この私たちの時代の教会にもはびこっているものであります。実際にどのような教

えになってくるかと言いますと、先ほども言いましたように、物質は、肉体は全て悪いものである。汚れたものである。もしイエス・キリストが霊的存在であるならば、神であるならば、悪いものである汚れたものである肉体を持ちようがない。神の子が肉を取ってイエスとして地上に来たというのは、これは間違いであるとしてグノーシス主義は否定するわけです。受肉した神を否定するわけです。むしろイエスは肉体を持たない幽霊のような存在であると。この神の受肉を真っ向から否定したのが、グノーシス主義の考えです。彼らはそれを神から特別に受けた知識だと主張するんです。そして同時に、すべて物質、肉体は悪いものですから、あなたの肉体において為す一切の罪は、所詮は悪い肉体がやっていることですから、いくら罪を犯したってそれは構わない。所謂放縦主義というものをそこから主張するようになります。「どうせ肉体は汚れているのだから、いくら汚れた行いをしたって、それ以上肉体は汚れようがない。だから肉体において何をしたらいいんだ。やりたい放題。罪はどんな罪だってどうせ肉体においてやることだから、それは避けられないし、それをしたところで別にどうって事はないんだ。」というのがグノーシス主義の考えであります。今日のカルトにもこういった教えは認められます。例えば、イエスの受肉を否定するキリスト教系の異端であれば、エホバの証人、モルモン教といったグループです。イエスは、神が人間の姿をとって来られたのではなくて、御使いが、例えばエホバの証人は大天使ミカエルが人間の姿をとって来られたのがイエスである。イエスはだから神ではないんだというわけです。モルモン教ではイエスはルシファーのお兄さんである。ルシファーというのは後に墮落したサタンの前身であります。そのルシファーの兄。やはり御使いであって、その御使いが人間の姿をとってこの世に来たのがイエスというお方であると。彼らは一様に「イエスを信じる。」と言います。でも私たちが言う「イエスを信じる。」とは全く違う意味で、「イエスを信じるクリスチャンです。」と彼ら主張するわけです。神の受肉いうものを真っ向から否定します。

第一テモテ 3:16 をここで参考までに開いて頂きたいと思えます。このテモテは、覚えて欲しいと思えますがエペソ教会の若い牧師です。ヨハネの手紙はエペソの教会に宛てられたわけです。エペソ人への手紙もあります。第一・第二テモテ、そしてヨハネの手紙第一・第二・第三、それらはエペソ教会に主に宛てられたものですから、共通点があります。また黙示録の 2 章にもあるイエスがエペソの教会に宛てた手紙も、それも共通項がありますから、そういった読み比べも非常に有意義な学びになるかと思えます。ここでは**第一テモテ 3:16**。勿論エペソ教会にはびこっていたグノーシス主義といったものを意識した内容となっていることを念頭に読みたいと思えます。『確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。(非常に大切な教理を今パウロという人は若いエペソ教会の牧師である後継者のテモテに語ろうとしています。これは救いの根幹に関わる最重要な教理の 1 つであると。前置きをした上で)「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。』』ちょっと残念なのは“キリストは”というところに*印が 2 つ付いております。で、欄外を見ていただくと、異本(これは写本が異なる本という意味)で「神」とあります。『神は肉において現れ』それが本来原文には記されていた内容だったと私は信じております。これは公認本文と呼ばれる received text と呼ばれる最も数の多い写本に見られる記述です。『神は肉において現れ』。「キリストは肉において現われ」でも問題はないんですけども、でもこれがもし『神は肉において現れ』となっていた場合は、イエスは他ならぬ神であるというふうに明確に宣言されるわけです。イエスの神格と言うものが、神性というものが、明確に打ち出されているということがここに証明されていると見るわけですけども、でも“キリスト”となるとキリストは人間であると。人間が肉において現れ、当たり前じゃないかという話になりますし、キリストの神性というものがぼやかされてしまうといった点があります。こういった議論をすると時間が全く足りないのです。少なくとも原文には『神は肉において現れ』となっていたものが、いつの間にか“キリスト”というふう書き換えられていた、写本によってそういったバラツキが後代に

なって現れてきたというふうに私は見ております。いずれにしましてもパウロは、受肉された神、これは非常に大切な教理である。その救いの根幹に関わるような最重要の教理を真っ向から否定するグノーシス主義。それに対する危険を若い牧師のテモテに警鐘として鳴らしているわけです。

同じように年老いた、長老と呼ばれたヨハネもエペソの教会に対して「このグノーシス主義には気を付けなさい。キリストは神である。神は肉をとられて、受肉してこの世に来られた。私はその生き証人である。私はその受肉された神、受肉された言葉と共に生活をしたんだと。生き証人の私が言うことを信じなさいと。そんな異端の教えに惑わされてはならないと。」それが**ヨハネの手紙**の背景にもあるわけです。神が人の姿をとって、私たちと同じ姿をとって、神の言葉を語り、父なる神とはどんなお方なのか。目に見える形で、目の前でディスプレイして下さった。ヨハネはこの神の心臓の鼓動を1番近いところで聞いた人物です。最後の晩餐の席でヨハネは、イエスの真隣、すなわち右側に席を置かれて、ちょうどその姿勢というのは、イエスの胸に寄りかかるような格好でありました。イエスの胸に寄りかかりながら、当時は寝転がってちゃぶ台のような低いテーブルの上に食事が並べられて、ちょうどカタカナのコの字型の格好をした長いテーブル、背の低いテーブル。その周りに左肘をついて、そして座って横臥食卓おうがといって、横になって食事をしたわけです。そんな食事のスタイルがイエスの時代も行われていたので、ヨハネはイエスのちょうど胸に寄りかかるようにして、それが右側の席に着いたという意味であります。イエスの、神の鼓動を聞けるそんな近くで、イエスの教えを聞き、そしてイエスに直接接触した人物であったわけです。そんなイエスは十字架に掛けられて死んで葬られてしまうんですけども、でも3日目に甦よみがえって、その時に復活の体を持って甦よみがえります。その体もまた触れられる体、その体もまた一緒にご飯を食べることの出来る体であったということ。これは**ルカの福音書 24 章**に実際にエピソードとして見られます。**ルカ 24 : 39**あたりを後で見て確認して頂きたいと思います。十字架刑の前後、ヨハネはイエスの1番近いところにいました。ヨハネはイエスの親類でもあって、そして十字架の足元にもただ1人残った弟子として、常にイエスと行動を共にした弟子でありました。そのヨハネが言うことですから、信憑性が高いわけです。私たちが聞いたもの。勿論私たちと言っていますから、ヨハネだけではありません。ヨハネ以外の使徒たちも、又使徒とは呼ばれていない沢山のイエスの弟子たち、信奉者たちも実際にイエスに出会ったんです。実際にイエスを目にして、イエスに触れたんです。疑い深いトマスは、復活後のキリストの御体に触れたんです。実際に釘の痕に、脇腹の槍の痕に、指を入れてみたわけです。実体があるお方なんです。グノーシス主義が説くような、幽霊のような存在ではなかったわけです。「あなた方にも私たちと同じ交わり、コイノニア、フェローシップを持ってもらいたい。」それがヨハネの願いでありました。自分自身のキリスト体験を分かち合いたい。それが伝道の目的です。何のために伝道するんですか。教会を大きくするため。有名にするため。献金を沢山集めるため。そうではありません。私たちが伝道するのは、私のあなたのキリスト体験を、あなたが直じかにキリストと実際に話したこと。キリストを通して体験したこと。そのことを分かち合う。そのために私たちは伝えるんです。伝道するんです。

ヨハネの手紙第一 1:3のところをもう一度見て欲しいと思います。『**私たちの見たこと、聞いたことを**』見てもいない、聞いてもいないことを伝えるのは難しいです。「伝道は難しいです。」と言う人は、往々にしてキリスト体験が乏しい人です。イエスをいっぱい見ている人は、イエスからいっぱい聞いている人は、躊躇なく普通に「今朝もイエスとお話をしてきました。イエスとはこういう方です。」と恐れることもなく、遠慮もなく、自分が実際に体験した話ですから自信を持って語れるわけです。でも自信がなく「どう伝えたらいいのかわからない。」とか、おどおどしたり、人の顔色を見てしまう人というのは、本当はあまり見ていないので、本当は直接聞くことが少ないので、むしろ人伝ひとづに伝え聞いたようなことを。で、不確かであって、自信を持って胸を張ってはなかなか伝えられないので、難しさを感じるわけです。「伝道は難しい。困難である。」と。でも、自分の体験したことを伝える場合は、相手の反応なんかほとんどと言っていい程

気にしません。信じてもらえるだろうかとか、そんな事はどうだっていいわけです。なぜならばあなた自身が確信しているからです。あなたはもう本当にイエスを見たんです。直接聞いたんです。これは揺るがない^{まが}紛いもない事実です。ですから、人がそれを信じようと信じまいと、これは私がもう実際に体験したことです。あなたが信じなくてもこの体験は否定されないもの。だからあなたはいくらでも伝えられるわけです。信じてもらえないかもしれないから伝えるのはどうも遠慮してしまうという人もいるかもしれませんが、おそらくそういう人は実際にはイエスを見てもないし、聞いてもない。そういう人だからだと思います。またはその体験があまりにも少なすぎる、乏しいからだと思います。見れば見るほど聞けば聞くほど、キリスト体験が増えれば増えるほど、本当に自信を持って語れます。相手を説得する自信ではありません。そうではなくて自分がキリストを体験しているという自信です。これは誰が何と言おうとも揺るがないもの。決して否定されないものであります。否定されたとしても、ビクつくことがないのです。本当にあなたは今日もイエスと出会ってきたからです。本当にあなたは今日もイエスといっぱいお話をしてきたからです。ヨハネは実際にイエスの一番近いポジションでそのことを全て体験しました。羨ましいなあと思う人もいます。「私もできたら二千年前ヨハネと同じようにガリラヤ湖のほとりをイエスと一緒に歩きたかった。山上の説教を直接聞きたかった。実際に 5,000 人の給食の時にそのパンと魚が目の前で爆発的に増えるのをこの目で見たかった。羨ましいなあ。弟子たちは、なんと羨ましいポジションに置かれていたのだろう。私もそんな時代に生まれ育ちたかった。」と言う人もこの中にあるかと思えます。で、私もかつてはずっとそう思っていました。でも、今日皆さんにお伝えしたいことは、2011年現在でも私たちはこのヨハネたちと全く同じレベルの交わりを、すなわち御父と御子との交わりを今もリアルタイムで体験出来るということです。何の遜色もなくです。二千年前のヨハネたちの持ったイエスとの交わりと、二千年後の現代の私たちとイエスとの交わりには何の遜色のない。むしろ、さらに加えて言うならば、二千年前よりも今の私たちの方がよほどイエスとの交わりをさらに親密なものとして持つことが出来ると言っておきたいと思えます。なぜならば私たちには聖霊が与えられているからです。勿論ヨハネたちはイエス・キリストが天に上げられた後に聖霊を助け主として頂いて、そして聖霊の力によって歩むというスタートをしました。私たちはそのことが既にイエスを信じる瞬間からもう既に与えられているわけです。ヨハネは 100 歳以上生きたと思われまじけれども、彼がそのようなレベルでキリスト体験したのは、大分大人になってからです。でも、現代の私たちはもう年端もいかない時からキリスト体験を持つことができ、それは 50 年 60 年 70 年 80 年と、ヨハネの時代の誰よりも長く持つことも出来ます。しかもヨハネの時代には、聖書がすべて揃っていたわけではありません。新約聖書はまだ完成していません。ヨハネの描いた著作が新約の最後を締めくくるものだと言いました。でも、私たちは完成された聖書を持っているわけです。その上で聖霊も頂き、そして輪を掛けて言うならば、私たちは今世の終わりに生きているという、特権的な立場に置かれております。世の終わりになぜ特権なのかと言うと、イエス・キリストが直接私たちを迎えに来てくださる可能性が 1 番高い時代、すなわち生きたまま地上から引き上げられる、携挙されるというそういう時代に私たちは、今生かされているからです。ヨハネは死にました。地上での生涯を全うして天にあげられましたけれども、私たちは肉体においても死ぬことがなく、場合によっては生きたまま携挙される。そしてイエスと顔と顔を合わせて空中で出会う。そんなジェネレーションに、そんな世代に今私たちは生かされているということ。ヨハネが理解出来ない終末時代の様々な出来事を、私たちはリアルタイムで見て、そのことを体感して理解できているわけです。これは一体どういうことか、見当もつかないと。ヨハネの時代の人たちが首をかしげたことも、私たちには何でも合点がいく。「これはこういう事。実際に文字通り預言は目の前で成就しているんだ。」と、そんな捉え方をすることで、より一層御父と御子との交わりは、親密なものとなっていくわけです。ですから二千年前のヨハネたちを羨ましがっている場合ではありません。むしろ彼らから見るならば、私たちの方がよほど羨ま

しいと。迫害もされておられません。特にこの日本という国では。世界中では勿論たくさんのクリスチャンたちが今も迫害されて、ヨハネの時代と同じように信仰の故に虐殺されたり、殉教しているという現実があります。でも私たちは今そのような所には置かれておりません。いつでも聖書を開くことができ、1人1冊若しくは2冊3冊といくらでも聖書が持てる。そして公においても伝道が出来る。集会も出来る。心行くまで賛美、礼拝を捧げることが出来る。何の制限もないわけです。ヨハネの時代からすると実に羨ましい時代です。専用の礼拝施設まで持っているわけです。ヨハネの時代にはそんなものはありませんでした。すべて家の教会です。ですから是非、皆さんは二千年前の使徒たちを羨ましがるのではなくて、私たちがどんな素晴らしい時代に今生かされているのか。どんなに恵まれているのか。ヨハネが私たちに願っていることは、決して非現実的な内容ではありません。二千年前の使徒たちと全く同じレベルの交わりを私たちも持つということが、これは非現実的な話ではないと言っているわけです。ヨハネが出会った同じイエスと私たちは同じレベルで交わることが出来る。

イエスが復活された直後、エマオに向かうその途上でイエスの2人の弟子がイエスとは知らずにイエスと出くわして、道々にいろいろな話をして、そして素晴らしいことに彼らは歩きながら路傍でバイブル・スタディーをイエスから直接受けるという恵みに与りました。これについても**ルカの福音書24章**に詳しく書かれております。エマオの途上の2人の弟子が、それがイエスとは気付かずにイエスと出くわして、イエスと共に歩いている。そして、イエスから『モーセ五書』から始まって、詩篇、そして預言者。旧約聖書全体を通してそこに書かれているイエスについての事柄を彼らはイエスから直接学ぶわけです。バイブル・スタディーとは、イエス・キリストを証しするものです。旧約聖書の中にイエス・キリストを見出すようにして学ぶことが大切であります。そのことによって2人の弟子の心は燃えました。それまでは意気消沈していたんです。自分たちの救い主が、自分たちの主が、十字架に掛けられて死んで葬られてしまった。彼らは、イエスの復活はまだ信じていません。目の前で自分たちに語って下さっている方が、復活の主だとは全く気付いていないで、彼らはガッカリしているわけです。それとは気付いていないイエスが、全然エルサレムで起こった大騒動について知らないのを見て「あなたは他所から来たんですか。」と、エマオの途上に向かう2人の弟子は、全くイエスのことが分かっていなかったわけです。でも、バイブル・スタディーを受けるにつれて、すなわち旧約聖書の中からイエス・キリストについて語られるその学びを受けるに、だんだん彼らの心が意気消沈していたのに、ガッカリして失望してブルーになっていたのに、段々段々冷たかった心は暖まって、ついには燃えるようになりました。ついには喜びに満ちるようになりました。「もっと聞きたい。」イエスとは知らずに他所者だと思って、2人の弟子はその人に懇願して「どうか今晚一緒に宿を取って、なおも私たちにバイブル・スタディーをしてもらいたい。」そうお願いして、そして一緒に食事の席につきました。その時にイエスがパンを裂いたんです。そのパンを裂いた瞬間、すなわち聖餐式を行ったその瞬間に2人の弟子の目は開かれたんです。それまでは遮られていて、それがイエスだとは気付かなかったんですが、その瞬間イエスだと気付いたわけです。でも、気づいたその直後、目の前から復活の主は消えてしまったわけですが、ここでも私たちに重要なことが語られております。私たちも時にエマオの途上の2人の弟子のように心が塞ぎ込んでしまいます。すっかり意気消沈して、悲しい出来事、ショッキングな出来事によって心は落ち込み、ブルーになります。ところが、御言葉を通して、御言葉と言っても聖書の中からイエス・キリストについて学ぶというバイブル・スタディーを通して、そして聖餐式を通してパンが裂かれる時、私たちの心は燃えたち、そして気が付いたら目が開かれて、「目の前にイエスが居るんだ。」と、そういう体験をいたします。それこそがヨハネが伝えようとしている御父と御子との交わりであります。それこそが豊かな永遠の命を体験するというものであります。イエスは本当はあなたの目の前に居るんです。あなたと一緒に歩いているんです。あなたと一緒にドライブしているんです。助手席にはイエスが居るんです。ここにもイエスが居ます。あなたの家庭にも、職場にも、どこ

にでもイエスが居て下さるんですが、あなたの目は遮られていて、塞がれていて、そこにイエスが居るとは気付かないんです。だから落ち込むんです。だからブルーになるんです。だからすっかり何もかも希望が消え失せてしまったかのような失望状態、鬱状態に陥ってしまわけです。イエスが目の前に居たら、あなたは決して鬱にはなりません。イエスが目の前に居るならば、あなたは絶対に落ち込みません。イエスがそこに居ることに気付かないから、あなたはすぐに嘆くんです。でも、一度イエス・キリストを証するバイブル・スタディーを。一度イエスの姿が見えてくるような聖餐式をあなたが味わうと、あなたの冷め切っていた心が暖まって燃え上がり、遮られた目は開かれるようになります。ただの教会のプログラムじゃないんです。ただの宗教儀式ではないんです。ただの義務や形式ではないんです。私たちは常にキリスト体験をすることが出来るんです。バイブル・スタディーを通してキリスト体験をします。聖餐式を通してキリスト体験をするんです。キリスト体験の伴わないような聖書の学びや聖餐式には、何の意味も価値もありません。バイブル・スタディーをしていてイエスの臨在を感じられない。イエスが本当に傍に居ることが全く分からないような学びをしているならば。聖餐式においても同じです。全く目が遮られていて、イエスが目の前に居るように思えない。そんな聖餐式を行っていても、それはただのパンくずとどどうジュースの数滴を口にするだけの時間でしかありません。是非御言葉のうちに、また聖餐式のうちにイエス・キリストを見て、感じ取って、イエスの臨在に触れて頂きたいと思います。それが、ヨハネが体験したことであり、ヨハネはそれを全てのクリスチャンに体験して欲しいと願ってこの手紙を書いたわけです。

もう一度テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 1:3**を改めて読ませて頂きます。『**私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは**（これが伝える目的、伝道の目的と言って良いと思います。）、**あなたがたも**（ここにいる全員もです。ここにあなたも含まれてることを覚えて下さい。“あなたがたも”のところにあなたの名前も入れて下さい。）**私たちと交わりを持つようになるためです。**（これが真のクリスチャンの交わり。それは）**私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。**』決して二千年前の使徒たちを羨ましがする必要はないと言っているわけです。でも、それが一体どうしたことですか。御父と御子の交わり。御言葉のうちにイエス・キリストを見る。聖餐式のうちにイエスの臨在を深く味わう。それが一体どうしたんですか。

4節を見て下さい。それが一体どうなるのかということが書いてあります。『**私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。**』これがヨハネの手紙**第一**が書かれた**第一**の目的であったと前回学びました。「**私たちの喜びが全きものとなる。**」溢れんばかりになる。そのためにこの手紙は書かれたんです。御言葉のうちにイエス・キリストを見出し、聖餐式のうちにイエス・キリストの臨在を感じ取ること。それが一体どうしたことか、何の関わりがあるのか。どうだっていいという話ではありません。それによって私たちの喜びが満ち溢れる、全きもの、パーフェクトなものになるからです。誰もが喜んでいたいと思っています。何があっても奪い去られない喜びを手にしたいと願うと思います。そのためには、御父と御子との交わりが絶対不可欠であります。すべてのクリスチャンは御父と御子との交わりを持っている限り、喜びの人であります。でも、残念ながらクリスチャンと呼ばれる人の中にも、喜んでいない人たちが大勢おります。喜びの人というよりも、むしろ悲しみの人。なんかいつも塞ぎ込んでいるような、影を落としているような、ちょっとブルーで暗い雰囲気（あつまい）のクリスチャンが結構皆さんの周りにもいるかと思えます。「いや実際のところ私はクリスチャンですけども、今は全然喜んでいません。喜べていません。嘆いてばかりです。落ち込んでばかりです。ガッカリしてばかりです。」勿論クリスチャンになったからといって何の問題もなくなって人生バラ色になるわけではありません。辛いこともあります。患難があります。迫害は避けられません。でも、だからといっていつでもブルーなままじゃないんです。だからといっていつでも苦々しい顔、眉間にしわを寄せて、そして歯を食い縛って、「クリスチャ

ンだから、証しにならないようなことはしてはいけない。」とか、律法主義的に何か重い荷物を背負って息絶え絶えに生きている苦しいチャンみたいな人じゃなくて、本当に喜びに満ち溢れたクリスチャンです。それが本物のクリスチャンです。私たちの喜びを奪い去るものは他にはないということを、御言葉も教えています。でも、それが分かっているけれども、現実はそのようではないというところからあなたは何とかして本物のクリスチャンであろうと努力して、背伸びして、本当は心はブルーなのに一生懸命作り笑いをしてヘラヘラ笑いながら「私には何の問題もありません。」というようなアピールをしながら、そしてクリスチャンらしい振る舞いに努めるわけです。でも、そういう生活は長続きはしません。必ず行き詰まります。必ずばれてしまいます。ほころびが出てしまうわけです。

エマオの途上においてすっかり落ち込んで、暗い顔つきをしていた 2 人の弟子たちは、確かに辛い出来事があったわけですが、でもバイブル・スタディーと聖餐式を通して彼らの心は引き上げられて燃えたって、喜びに満ちるものと明るく変えられたわけです。クリスチャンのしるしは、喜びであります。それがクリスチャンである証しであります。少なくとも健全な歩みをしているクリスチャンならば、どんな辛いことがあっても喜んでいられます。それはヘラヘラ笑っているという姿ではなくて、辛いことがあっても、痛ましい出来事があっても、でも深い喜びが心の中には必ず体験されているという。そのことは**使徒の働き**の初代教会の中にも見られました。**使徒 2 : 42~47** を開いて頂きたいと思います。初代教会の生き生きとしている姿がそこに記録されています。『⁴²そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし（勿論ここで言う“交わり”というのは、ヨハネが言ったところの“御父と御子との交わり”です。そして）、パンを裂き（聖餐式です）、祈りをしていた。（初代教会は 4 つの柱、4 つの主要な働きをもって生き生きとしていました。1 つは“使徒たちの教えを堅く守り”、御言葉を学んでいました。そして交わりを持っていました。フェローシップです。で、聖餐式です。パンを裂く。で、さらには祈りです。これが教会成長の最もシンプルな秘訣です。鍵であります。）⁴³そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議とするしが行われた。⁴⁴ 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。⁴⁵そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。（これは当時の特殊な事情が背景にあります。クリスチャンになりたての彼らはエルサレム以外の地方からも大勢集まっていました。この時はちょうど 7 週の祭り、ペンテコステのお祭りがあったので、外国からもたくさんのユダヤ人たちが集まっていて、そしてエルサレムでペテロメッセージを通して彼らがイエス・キリストを信じる信仰に至って救われたわけです。その時に初代教会が産声を上げたわけです。まだ生まれただけのクリスチャンですから、すぐにまた祖国に戻るという事は出来なかったわけです。ですからしばらく留まっている間、彼らは外国から来ていますから生活する術がなかったわけです。資金も途絶えてしまうわけです。ですから地元クリスチャンたちと協力して皆で宿泊先を分かち合って、資産を分かち合って、そして彼らが初代教会においてしっかりと御言葉によって栄養を受けて成長して、そして祖国に帰ってからも元気なクリスチャンとしてさらに福音を宣べ伝えることが出来るように、しばらくはエルサレムに留まっていく必要があったわけです。ですからそういう特殊な事情があったので、当時の教会は皆で、所謂キリスト教共産主義のような形で、誰も「自分の財産だ。」というようなことは言わずに分かち合っていたわけです。それは霊的には今日の教会にも十二分に適用出来ると思います。私たちの財産というのは、本来はありません。すべて神様から頂いたもので、私たちは皆神の家族ですから、すべての財産は共有財産であるべきなんです。だからといって皆さんの銀行の預金通帳を牧師に預けなさいという話ではありませんので、そんな事は全くもってカルトのやることですが、メンタリティーとしては、私たちは皆家族ですから、当然家族が困ったら助け合う。当然私たちは愛し合って、互いに仕え合っていますから、それを喜んで出来るわけです。強要されるまでもなく、強制されるまでもなく、当たり前のこととしてそれが出来るわけです。

で、話を戻したいと思えますけれども、46節に)⁴⁶そして毎日、心を一つにして宮に（エルサレムの神殿に）集まり、家でパンを裂き（各家で聖餐式も守っていました。で、その後）、喜びと真心をもって食事をともにし（“喜び”という言葉が出てきました。これが初代教会の大きな特徴でありました。教会には喜びが満ち満ちていました。喜びがないような、喜びが溢れていないような教会は、もはや教会ではないと言ってもいいかと思えます。）、⁴⁷神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。』毎日仲間が、兄弟姉妹が、神の家族が、クリスチャンが加えられていく。大リバイバルです。そのような素晴らしいリバイバルを経験したければ、初代教会に私たちは倣う必要があります。教会の成長の鍵として、4つのことが教えられていましたが、その結果喜びも満ち溢れたわけです。交わりと喜び、第一ヨハネ1章でも語られていた点であります。喜びこそがクリスチャンの印、教会の特徴であるというところは是非注目して頂きたいと思えます。

で、この点について私の尊敬する20世紀の最大の説教者と呼ばれているD.M.ロイドジョーンズという人の言葉を少し皆さんに抜粋して御紹介したいと思います。『なぜ大多数の人は教会に来ないのであろうか。（重要な質問、興味津々の質問だと思います。なぜ大多数の人教会に来ないのであろうか。皆さんもよく考えます。）なぜ御言葉の宣教は今日このように実りのないものに終わってしまっているのでしょうか。私はその疑問に答えることが出来ると思う。いや実は教会の外部の人々が答える。（ノンクリスチャンがあなたになりかわって答えてくれますよと言っています。）これは外部の人々の言っていることである。彼らは私たちのことを惨めなクリスチャンと呼ぶ。（ブルーなクリスチャン。全然喜んでいないクリスチャン。いつもイライラしていて、いつも不平不満ばかり言って、いつも落ち込んでいて、いつも塞ぎ込んでいるブルーな失望したクリスチャン、暗いクリスチャンです。）彼らは私たちのことを惨めなクリスチャンと呼ぶ。なぜ彼らは私たちのところに来ないのか。彼らは答える。「惨めになりたくないからだ。」（あなたのような人間になりたくない。だから私は教会に行かない。だから私はクリスチャンにならないんだと。厳粛に受け止めてもらいたいと思えます。あなたの家族がクリスチャンになりたくない、教会に行きたくないというのはなぜでしょうか。いろいろ理由はあると思えますけれども、多分その第1位は、あなたのようになりたくないから。笑い事ではないですけれども、的を射ているかもしれません。）惨めになりたくないからだ。私たちが教会に行っているのは、おそらく敬虔な父や母にそうすると約束したからであるというような印象を私たちは与えている。（クリスチャンホームの子供たちにおいては特にそうです。親が行けと言うから仕方がない。）私たちが教会に行きたくないと思うことがよくある。週に1度行けば表彰ものである。それは素晴らしいということになる。私たちがあたかも犠牲を払って教会に行ってるかのような印象を与えている。（頑張ってるって行っているんだと。でもそれは義務感からだと言っているわけです。ロイドジョーンズは、それは喜びではなく義務である。皆さんが週に何回も教会に来るその姿はどう映っているでしょうか。喜びで来ているのであれば表彰ものだと言っています。でも、「行かなきゃいけない。他のメンバーも行っているし、行かないとどう思われるか、何を言われるか。教会に足繁く通っていれば立派な敬虔なクリスチャンと認めてもらえるから。」それは間違った動機です。）だから人々が教会に入ってこないのは驚くべきことではない。何が人々を教会導くのかご存知だろうか。それはあなたと私がこの喜びと歓喜にあふれる時である。私たちが住んでいるのは邪悪な世界である。快樂にふけり、麻薬を服用し、他の人々も単に悲しみ、塞ぎ込んでいる印象を与え、習慣的・義務的な態度に周知するなら、彼らは私たちに何の関心も示さない。しかし、私たちが喜びと言いつくせない栄光の望みを持っているのを彼らが見る時、また彼らと同じ世界に住みながら、スリルと歓喜に満たされている何かを私たちのうちに見る時、彼らは教会へ押し寄せてくるのである。（酒に酔わなくても楽しい。快樂にふけらなくても心は満たされている。その姿が魅力的なんです。一緒に酒を飲んでヘラヘラ笑って、そして一緒になってパチンコに興じている。そんな姿を見ても誰も魅力を感じません。クリスチャンとは名ばかりと。）歴史の中から1つの偉大

な例を挙げてみよう。ご存知だろうか。これは多かれ少なかれジョン・ウェスレーを改心に導いた出来事である。ウェスレーの物語を読んだことがあるだろうか。彼は大西洋を英国から米国へ渡り、また戻った。覚えているだろうか。その最初の航海の時、大西洋の真中で大きな嵐に遭遇した。ちっぽけな船が沈むだろうとは誰の目にも明らかだった。しかしウェスレーの乗っていた船にモラビア兄弟団の小グループが同船していた。ウェスレーはこの一団の人々が集い、祈り、賛美し、聖霊による喜びにあふれている様子をずっと観察していた。しかし今や恐るべき嵐が襲ってきた。ウェスレーは死の用意ができていないことに気づき、ハラハラしていた。彼は恐れ、何をすべきか分からなかった。そこでモラビア教団の人々を見に行こうと考えた。彼にとって全く驚きだったのは、この人々には何の変化もなかったことだ。彼らはなおも喜びに満たされ賛美していた。嵐は彼らを変えることはなかった。海が静かな時と全く同様に彼らは嵐の中で賛美していた。皆さんこれこそがいつも真の教会の特徴であった。教会がこのようになる時、教会は外部の人々を惹きつける磁石となるのである。私たちの御霊の喜びと歓喜を持っているのを人々が目撃する時、彼らは私たちに聞くために教会に押し寄せて来るのである。』嵐が襲って来た時、あなたに試練が襲って来た時、あなたはパニックになっている様子をおじ惑っている姿を、不安で不安で仕方がないという姿を、ノンクリスチャンの人たちに見せつけてしまっているのでしょうか。それとも、何があっても動じない、平常通り、ますますむしろ試練に遭えば遭うほど驚き怪しむことなく、この上ない喜びとしてそれを受けている。そういう姿が他者に映っているのでしょうか。であるならば、素晴らしいことが起きます。彼らも「一緒に教会に行きたい。」と言うようになります。でも、あなたが普段からつまらなそうな顔をして、普段から暗い雰囲気^{かも}を醸し出しながら悲しげに悲壮感が漂って、そしてちょっとしたことで右往左往して動揺してしまう。すぐにビクついてしまう。そんな姿を見せつけていたら、誰もあなたの行っている教会に行きたいとは言ってくれません。そのことがクリスチャンの一番の魅力であり、特徴であり、印であるということ。それがますます溢れるように、全きものとなるというのが、この手紙の目的ですから是非元気になってもらいたいと思います。今それを言われて痛い思いをしている人がいるかもしれません。「その通りです。私の家族は私の姿を見て、その上で教会に行きたくないと言っているんです。私のようになりたくないと言われませんでした。もう私は駄目クリスチャンです。失格クリスチャンです。私のようなものは却って教会に害をもたすだけです。」と。そんな事はありません。あなたのためにこの手紙は書かれたんです。あなたの喜びが今、全きものとなっていなかったならば、溢れたものとなっていなかったのであればこそ、この手紙がそのあなたの欠けを満たすものとなります。そのあなたのブルーな心を燃えさせたせて、そして喜びに満ち溢れるものとしてくれますので、期待をして欲しいと思います。

で、またテキストに戻って頂いて、今丁度 **4 節** のところを見たわけですがけれども、**5 節**以降これはヨハネの手紙の特徴であります。また福音書にも見られる特徴ですがけれども、対照的な両極のものを並べて、コントラストを通して教えるというスタイル。例えば光と闇というコントラスト。そういう両極のものを使ってメッセージを展開していきます。そういったところには是非注目して下さい。今ここでは光と闇という2つの事物を見て、両者は対照的です。光と闇、白黒。2つに1つです。キリスト教には中立はありません。ハイか、イエ。信じるか、信じないかです。光か、闇か、どちらかです。白黒ハッキリさせなければいけません。中間の灰色、グレイゾーンとか、光と闇の中間、トワイライトゾーンというものはキリスト教には存在しません。そのことがこれから語られていきます。あなたはどうでしょうか。イエス・キリストはそれを『なまぬるい』というふうに表示しました。なまぬるいクリスチャン、灰色クリスチャン。光じゃなくて灰色です。トワイライトゾーンに身を置いているような人、それは吐き出したくなるほど忌み嫌われる状態だということも忘れてはいけません。光か、闇か、どちらかなんです。光でなければ、闇なんです。灰色は白じゃないんです。それは黒と同じです。で、ここで **5 節**を見て下さい。『神は光であっ

て、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。』神は光だという概念です。これが1章2章に貫かれています。先のアウトラインで見たように、神の光を経験するというポイントです。これは神学的に神が光だということを学ぶということではありません。そうではなくて経験的に神が光であるということをあなたが知ることです。ここで3節からの文脈の流れも意識して頂きたいと思います。神は光と、喜ぶということ。それは密接な関係があります。なぜ私たちは喜ぶのでしょうか。喜べるのでしょうか。何があっても喜んでいただけるのでしょうか。それは神のうちには暗いところが少しもないからです。だから喜べるんです。だから喜びは尽きないんです。神は光であって、神のうちには暗いところが少しもないから、私たちは真っ暗闇には置かれないわけです。いつでも光を見出すことができますから喜べるんです。お先真っ暗では確かに喜べません。でも、光の中に留まるならば私たちは常に希望を持てるわけです。神のうちには少しも暗いところがありません。何のダークサイドもないんです。だから暗いクリスチャン、根暗なクリスチャン、そんなものは非聖書的であって、反聖書的なんです。本来は存在し得ない、してはいけない存在です。この人は暗いクリスチャン。本当はそういう人は居てはいけないんです。本当の状態はその人は光のうちにはいないということです。トワイライトゾーンにいるんじゃないんです。その人は暗闇の中にいるんです。イエス・キリストはマラキ4:2によると『義の太陽』と呼ばれています。またヨハネの福音書8:12においてはイエス・キリストは『世の光』だと言われています。イエス・キリストのうちには暗いところが少しもありません。イエスキリストを見て「この人には陰があるな。」とは誰も言わなかったわけです。そんなイエスとヨハネは生活を共にしていました。ヨハネがつぶさに観察する限り、イエスには暗いところが少しもない。なぜならばイエスは神であって、『世の光』であるから、『義の太陽』であるからです。ですからクリスチャンと呼ばれる者であれば、すなわち名の通り“キリストに属する者”“キリストに似る者”それがクリスチャンです。であるならばクリスチャンは絶対に暗いという事はありません。暗いクリスチャンというのはもっと言えば反キリスト的だと言っていいと思います。注意して欲しいと思います。

今自分が暗い状態にあるならば、ブルーで落ち込んでいて、沈んでいて、塞ぎ込んで下を向いているような状態であるならば、それは反キリスト的な状態だと。そんな状態で教会に通っていてもあなたは光になるんじゃないです。それは実に中途半端なトワイライトゾーンにいるような、またはなまぬるいという状態であります。熱いか、冷たいか、どっちかであってほしい。光か、闇か、そのどっちかなんです。中間はありません。

で、6節7節。そちらも見たいと思いますが、そこには“歩く”という重要な言葉が繰り返し使われております。“歩く”です。前にも伝えたことがあると思いますが、この“歩く”ということ、“歩み”というのは、まさに信仰生活のことを指しているわけですが、信仰生活は確かに“歩く”ということです。“歩く”という事は前に進むということです。前進が伴う、成長が伴うというものです。常に動いているんです。立ち止まる事はありません。それが信仰生活です。立ち止まったまま成長が伴わない、それは信仰生活ではありません。大切なのはトーク(talk)ではなくて、ウォーク(walk)であります。トーク(talk)話すことじゃなくて、歩くことウォーク(walk)です。多くの人はトークばかりします。信仰生活とは何たるか。いくらでも語れます。でも歩もうとはしません。語ることはしても歩むことはしない。口先ばかりで言行一致ではない。いくら説明できても、あなたが説明した通りのことをあなたが実践していないならば、それは歩いていることにはなりません。それは、光の中に留まっているとは程遠い状態です。トーク(talk)よりも、ウォーク(walk)であります。

で、6節を見て下さい。『もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。』“もし”という言い方は

8節にも“もし”とあります。英語で言うところの“if”です。私たちに疑問を投げながらテストするかのようにして、あなたが本物のクリスチャンならば、あなたがキリスト体験をしているならば、本当にリアルなキリストと出会っているならば。“もし”という言い方です。『やみの中を歩む』とありますけれども、これは具体的にはいろんなイメージが出来ると思いますけれども、例えば罪のライフスタイルを送っている状態。“歩く”というのは継続的というニュアンスがそこに含まれています。1度2度たまにじゃなくて、継続して罪を行っている。肉的な罪を、おぞましい恐ろしい不道德な罪を行っている。暗闇の状態、それを連想出来ると思います。ポルノ中毒者とか、麻薬中毒者とか、継続的に罪を行っている。アルコール中毒とか、ニコチン中毒とか、そういった具体的な罪も連想出来ると思います。

その一方でこの“やみ”というのは光とは対照的な状態であることも明示されています。光か闇か。で、光というのは先ほども説明したように、これはまさに喜びをもって御父と御子と交わりを持った生活を送っている状態のことです。ということは、喜びとは対照的な状態が闇でもあると言えるわけです。ですから必ずしもあなたが何らかの中毒症を患っているような肉的な罪を行っていなくても、あなたに喜びが見出せないならば、あなたは闇の中を歩んでいると言えると思います。「私はそんなポルノ中毒者じゃありません。私はそんなアルコール中毒者ではないです。」とあなたは自負するかもしれません。「だから私は闇の中を歩んでいないんだ。」と。むしろ「私は光の中を歩んでいるんだ。」と、あなたは主張するかもしれません。でも、もしあなたのうちに喜びが爆発していないならば、いつも暗い表情をしているならば、「どうしたんですか。」なんて声をかけられたら、赤信号と思って下さい。勿論辛いことがあって、時に落ち込む事があると思います。でも、毎回毎回「どうしたんですか。」病気で顔色が悪いとかそういう話ではなくて、雰囲気がいかに暗い、いかに何か喜べない要因を抱え込んでしまっている。そういう悲しんでいるような、辛そうな、面白くなさそうな、喜びとは程遠いような雰囲気を醸し出しているような人たちは、間違いなく光の中にはおりません。残念ですけれどもその人たちは、闇の中を歩んでいるという状態であります。喜びの欠けた、暗い、下を向いているばかりの生活。ブルーな状態。それが暗闇とも言えます。単に教会に通うことが光の中を歩むことではないと言っているんです。それはまるでトワイライトゾーンの中を歩んでいる暗闇のクリスチャン。教会には通うけれども、でも全然笑えない。心の底からスマイルが湧いてこないわけです。周りに合わせてせせら笑ったり、へらへら笑ってみたり、ごまかしながら「何の問題もないです。」みたいなそんな姿を一生懸命背伸びしてアピールして。悲しげな姿です。そういう姿は遅かれ早かれ暴かれます。あなたが本当に光の中にあるのか、闇の中にあるのかは、すぐに判明いたします。既にばれていると思って欲しいと思います。ですから繕わないで下さい。その後を読んで頂ければ、繕ってはいけないことが分かります。そうではなくて「正直にそれを認めなさい。あなたは闇の中に留まるべきではない。トワイライトゾーンで自分をごまかすべきではない。グレーゾーンで自己満足してはいけない。それは闇である。それは罪である。でもその罪をあなたが言い表すならば、正直に認めるならば、告白して悔い改めるならば、あなたは再び光の中にもう一度戻されるから。」そのことがこの後に書かれているわけです。光の中にいる、ということは、御父と御子との交わりを持って喜びに満ち溢れている状態です。そうでなければ、光の中にいるとはとても言えない。そうでなければ、あなたは偽っている、嘘つきだ、と言っているわけです。そうでないのに「私は光の中を歩んでいる。」と主張するのは、これは自分を偽ること、自分を偽り者にする、嘘つきになるということです。教会に通っていても自動的に光の中を歩むクリスチャンになるわけではありません。洗礼を受けたら自動的にクリスチャンになるのではありません。そうであれば野尻湖で泳いでいる人は皆クリスチャンになります。そうではなくて本当のクリスチャンは、御父と御子と生きた交わりを持って喜びに満ち満ちている人たちです。もしあなたが習慣的な肉的な罪に陥っているならば、あなたは闇の中にいます。もしあなたが喜びをすっかり失ってしまって、いつも落ち込んでばかりのブルーなクリスチャンに陥っているならば、あなたは闇の中におります。一時

感情的に暗くなるという話をしているのではありません。ほぼ四六時中と言っていいと思います。喜んでいる姿が珍しいという状態です。一時喜ぶとか、そういう話じゃなくて、ほとんどが暗い、ほとんどが苦しい、辛い。そんな顔つきをして、そんな雰囲気醸し出しているクリスチャンは皆、暗闇の中におります。

で、7 節に『しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。』素晴らしいです。暗闇の中にいるということをまざまざと見せつけられて、自分の本当の姿が暴露されて断罪されたかのような気持ちになってしまった人も、“しかし”あなたが光の中に留まりたいと願うならば、これ以降に書かれていることを自分にあてはめて適用して、実践して欲しいと思います。暗いところが少しもない。光り輝く喜びに満ち溢れるクリスチャン生活を送りたいと本当にあなたが願っているならば、しっかりと聞いて欲しいと思います。そのためにはまず、互いに交わりを保つ必要があります。クリスチャンの交わりの中に自分自身をキープしておく必要があります。教会に行かなくなったらアウトです。あなたは喜びを失い、御父と御子との交わりも失い、喜びは失せていきます。だからといって機械的に、形式的に教会さえ通っていれば、自動的に光の中を歩むことになる、というのはまた極論であります。それは別として、あなたが本当に光の中を歩み、御父と御子との交わりをエンジョイして喜びに満ち満ちた生活を送りたいならば、私たちはその交わりを互いのうちにいつも体験していく必要があると言っているわけです。教会に通っていても、ただ挨拶程度、ほとんど会話も交わさずにただ礼拝のプログラムに出席してバイバイするだけ。ただ椅子を温めて帰るだけ。そのような機械的な教会通いでは、光の中を歩むクリスチャン生活は約束されません。そうではなくて、教会に来たならば御父と御子との交わりをお互いに楽しむように、分かち合うようにして、そして教会に通い続けること。これがここで言われている『互いに交わりを保つ』という話であります。教会にさえ通っていればよしという話ではないということです。あなたは教会に来て兄弟姉妹とともに御父と御子との交わりを共有しているのでしょうか。主があなたのためにどんなことをして下さったのか、分かち合っているのでしょうか。またはそのような兄弟姉妹の体験をあなたは耳にして、共に主を誉め讃えているのでしょうか。共に主に感謝を捧げて、共に祈り合っているのでしょうか。そのような実態が伴わない教会生活をいくら送っていても、それは光と闇の丁度陰を歩いているような、トワイライトゾーンを歩むような中途半端ななまぬるい教会生活になってしまいます。そんな生活の中で喜びを期待してもそれは不可能であります。実質それは闇の生活を送っているに他ならないからです。

で、ここで次に注目すべき言葉として『御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。』“すべての罪”とありますから、1 つの例外もないということです。すべての罪から私たちをきよめますと。原語では“きよめ続けます”と。たった 1 回のきよめではないんです。何度罪を犯しても、どんな罪を犯しても、御子イエス・キリストの血潮はすべての罪を洗いきよめて下さいます。そして、きよめ続けて下さいます。だから喜びが戻ってくるんです。だから喜びを持続出来るんです。これがなければ私たちは常にブルーです。罪を犯したらますます暗くなる一方です。赦しが体験出来ないならば、解放が体験されないならば、私たちはがんじがらめになって罪の中でただただ暗闇を味わうだけであります。喜びとは程遠いわけです。でも光の中を光の神と共に歩み、交わりを保っていくならば、具体的にはバイブル・スタディーを通してイエス・キリストを見出し、聖餐式を通してイエス・キリストと交わりをエンジョイする。冒頭に話した内容です。それがなされているならば、それがあなたの教会生活であるならば、間違いなくあなたは光の中に留まり続けることができます。パウロは『罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。』と言いました。だからといって、恵みが満ちあふれるためにじゃんじゃん罪を犯すべきかと言ったら勿論そうではありません。絶対にそんなことはない、パウロは完全否定しました。問題は、どんな

罪でも赦されるんですけども、罪を犯せば必ずと言っていいほど罪には結果が伴うわけです。蒔いた種は必ず実を結んで刈り取る羽目になるわけです。これが、罪がもたらす弊害、悲劇であります。すべての罪は御子イエス・キリストの血潮によってきよめられる。これも真理ですけども、だからといって罪をいくらでも犯していいか。「罪の免許状をもらって、ライセンスを得て、恵みも増し加わるんだから、どうせ何をしたら赦されるんだから、やりたい放題やろう。」そういう話にはならないわけです。なぜならば罪には必ず結果が伴うからです。痛み、苦しみ、後悔が伴うからです。

民数記 32 : 23 はいつも皆さんに取り上げている箇所でもあります。『しかし、もしそのようにしないなら、今や、あなたがたは主に対して罪を犯したのだ。(その後) あなたがたの罪の罰があることを思い知りなさい。』『あなたがたの罪の罰があることを思い知りなさい。』私の気に入っている英語の聖書、欽定訳の King James Version では “be sure your sin will find you out.” (これは確かなことだ。あなたの罪があなたを見つけ出す。)それが原文に近い訳です。これは確かなことだ。確かに知りなさい。または、あなたの罪があなたを見つけ出す事は確かなことだ。これは間違いない。100%あなたの罪は、あなたがどこへ行こうと、どこに身を隠そうと、あなたの罪があなたを見つけ出す。これは確かなことだ。というのがそこでの訳であります。適訳であります。

また、もう一箇所**エレミヤ 2 : 19**。ここでも所有格に注目して下さい。所有格というのは“あなたの”です。**民数記 32 章**のところでも、「あなたの罪があなたを見つけ出す。」とあります。ここでも『あなたの悪が、あなたを懲らし、あなたの背信が (英語の聖書ではバックスライディング”backsliding”です。)、あなたを責める。だから、知り、見きわめよ。あなたが、あなたの神、主を捨てて、わたしを恐れないのは、どんなに悪く、苦々しいことかを。—万軍の神、主の御告げ。—』所有格に注目して下さい。あなたの罪、あなたの悪、あなたの背信またはバックスライディングです。多くの人は勘違いしています。罪を犯したらバチが当たる。神のバチが当たると思ったら大間違いです。そうではないんです。あなたが罪を犯したら、あなたの罪があなたを見つけ出すんです。あなたを指名手配犯にして、あなたを追い回すんです。生きた心地がしません。ばれるんじゃないか。神がそうするんじゃないんです。神はあなたのために、罪のないひとり子を与えて、あなたが裁かれないように、あなたが罰を受けないように御子を十字架に掛けて下さったほどの方です。その神が、あなたが罪を犯したからといってあなたを追いまわして、そしてあなたを指名手配犯として常に脅かす、じゃないんです。じゃなくて、あなたの罪があなたを脅かすんです。あなたの悪が、あなたの背信が、あなたのバックスライディングが、あなたを責め、懲らしめるんです。勘違いしてはいけません。神様が、あなたが罪を犯した結果、怒り散らしてあなたを非難して、責めて、あなたを懲らしめる、あなたにバチを与える、そう思ったら大間違いです。私たちの神はそんな神ではありません。真実はあなたの罪なんです。あなたの悪なんです。あなたのバックスライディング、背信なんです。それがあなたを苦しめるんです。だから罪は悪いんです。何度も言ってますように、罪は禁じられているから悪いものではありません。罪は悪いから禁じられているんです。「あれもしてはいけない。これもしてはいけない。キリスト教は堅苦しい。」そうじゃないんです。罪があなたにどんな悲劇をもたらすのか、どんな痛みをもたらすのか。その弊害が想像を絶するほど痛ましいものであることを主は知っているので禁じているんです。罪は本当に悪いもの、むしろ憎むべきもの。どんなに悪く、苦々しいか、主はご存知だから、あなたに罪は犯してもらいたくないと懇願しているわけです。だから警告し、禁じているわけです。誤解しないで下さい。どんな罪でもキリストの血潮によって赦されない罪は、ひとつもありません。唯一例外を言えば、イエス・キリストを拒否するその罪以外は。それ以外はすべて赦されます。でも、だからといって罪を犯しまくろうという話にはならないと言っているわけです。罪を犯せばあなたは絶対に後悔します。罪を犯して後悔しないという人は、しなかったという人はこれまで私は 1 人も見たことがありません。不倫して良かったとか、ポルノ中毒に陥って良かったとか、アルコール中毒になって良かった

とか、そういう人はこれまで私は1人も出会ったことがありません。全ての人は「あんなことはしなければ良かった。言わなければ良かった。関わらなければ良かった。」皆一様にして後悔を口にします。罪がもたらす弊害がどんなものか、体験してしまったからです。罪は全て憎むべきものだ。箴言8:13にもこう書いてあります。『主を恐れることは悪を憎むことである。』悪を憎むならば、あなたは罪を犯すことはありません。罪を犯す時、間違いなく私たちは悪を憎んでいません。罪を犯す時、私たちは間違いなく主を恐れていません。主を恐れて、悪を憎んでいるならば、私たちは絶対に罪を犯さないはずであります。主を恐れるというのは、ビビるという意味ではありません。そこに主を認めるということです。主はここにおられる。目の前に居るのに、あなたは罪を平気で犯すことは絶対に出来ないと思います。主に対する畏敬の念を持っているならば、主を恐れ敬っているならば、主を悲しませたくないと心底願っているならば、あなたは罪を平気で犯す事は絶対にいたしません。何度も何度も繰り返しても何とも思わないという状態では、絶対にあり得ないと言っているわけです。確かに罪は憎むものですが、罪には常習性をもたらすような要素もあります。罪ははかない楽しみをもたらすという事も、これもまた事実であります。だから人はハマっていくんです。

ヘブル11:25を開いて見て下さい。これはモーセのことです。『はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。』とは信仰の人モーセの言葉です。罪は確かににはかない楽しみ。でもモーセはこの時、ちょうど成人した時、前節の24節を見て頂くと『信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、』世界最強の最大の帝国の後継者と呼ばれることを拒んで、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民、イスラエルの民とともに苦しむことを選び取りました。成人して気付いたんです。罪ははかない楽しみ、一時の快樂に過ぎないんだと。モーセが成人した時というのは、40歳です。40歳というのは使徒の働き7:23(『四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。』)に書いてあります。モーセが大人になった時、成人した時、すなわち40歳になった時に、^{ようや}漸くはかない罪の楽しみということに気付いたんです。40歳にもなれば罪がはかない楽しみに過ぎないということを悟らなければいけません。あなたが40歳を過ぎてても、まだ罪を楽しむようなことをしているならば、あなたは大人とは言えません。ただのガキです。罪の火遊びは危険ですから止めなくてははいけません。40歳にもなれば気付くんです。皆さんは、ここにいる大半は、40歳以上の方々ばかりです。もうあなたの体験を通してこのことは実証されていると思います。罪ははかない楽しみに過ぎない。一時の快樂しか与えない。こんなものに身を捧げているようでは、こんなものに時間や労力をかけているのであれば、生涯を棒に振ると。こんなくだらないもののために、こんなつまらないもののために、こんな虚しいもののために。40歳にもなればそのことに気付くはずであります。そして神の民とともに苦しむことを選ぼう、そのことが永遠に価値のあることであると、気付くはずであります。

第一ヨハネ1章に戻って頂いて、もう終わりにしたいと思いますが8節に『もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。』「罪はない。」と言っている人たちというのは、当時の異端者、グノーシス主義の人たちです。「私たちには罪はない。」彼らが言うところは「罪を犯しているのは私ではなくて、私の肉体です。」と。彼らの教理というのは、霊はすべて善で肉(物質)は全て悪である、という二元論でしたから、「罪を犯しているのは肉の部分、私じゃなくて私の肉体である。」と。「肉体が罪を犯しているから、私は罪はないんだ。罪を犯してはいないんだ。」と、そう言っているわけです。これは現代の哲学者の間でいうところの相対主義というものです。彼らは「絶対主義というものは存在しないんだ。私が良いというもの、それはあなたにとっては良くないかもしれない。でもあなたが悪いといったものは、必ずしも私にとって良くないとは限らない。あなたは罪と言うけれども、これは私

にとっては罪ではない。」相対主義です。絶対主義などない。絶対的な存在である神などいないんだという
そういう考えにもこの二元論は影響を与えているわけです。「肉体において罪を犯す。それは自分の霊の部
分で犯しているわけではないから何をしても構わない。私の手が勝手に動いて万引きしたんです。悪い
のは私の手です。私じゃないんです。」と。ありえないことです。「私の手が女性のお尻を触ったんです。
でもそれは私じゃないんです。」そんな言い訳は一切通用しないわけです。それと同じようにグノーシス主
義者もまるで荒唐無稽なことを主張しているわけです。異端的な教理です。罪はないんだと。「罪を犯して
いるのは私の肉体であって、私は罪を犯していない。」ですからこれは特にグノーシス主義というカルト、
異端に対して語っている言葉でもあります。特にここはクリスチャンに対して語っている言葉のように受
け止められることが多いわけですが、教会の中にいる異端者。異端的な教えを説いて、「罪はない。」
と主張している人たちに対して語っている内容であります。それが第一義的な解釈であります。

で、9節で『もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、
すべての悪から私たちをきよめてくださいます。』感謝です。私たちはすべて御父と御子との交わりを持ち、
喜びに満ち溢れる光の中を歩む光の子供でなくてはなりません。でも、そんな私たちでも勿論罪を犯して
一時は暗い影を落とすことがあります。落ち込むこと、ブルーになることも勿論ありますが、でも
暗いままではありません。このきよめはキリストの血潮によって、私たちではなくてキリストの血潮に
よってなされます。誤解しないで下さい。罪を言い表したら、罪の告白をしたら赦されるんだと。一部の
クリスチャンたちは、告白していない罪がある限りは神様とは交わりが持てないとか、祈りは聞かれない
とか。そういう教えをする、異端的な教えをする人たちがおりますが、それは間違いです。罪の赦しの根
拠は、罪の告白にあるのではなく、罪の赦しの根拠は、キリストの血潮、恵みであります。私たちの行い
によって私たちの罪が赦されるのではなくて、キリストの行い、すなわち十字架の上で流された血潮によ
って私たちはすべての罪から、悪からきよめられていくわけです。ですから、ある人たちは「罪の告白を
しなければその罪は一生残ったまま消えない。罪の告白がなされなければ、神と親しい交わりを持つこと
が出来ない。」これは大間違いです。ある教会はそのことを強調して具体的な罪を言い表わすように、一つ
一つ列挙するように、それを紙に書いて、それを牧師に告白するようになるとか、そういうことを強めます。
勿論罪の告白をすること自体悪い事でもないですし、むしろ奨励すべきことです。ただ罪の告白の根拠と
していることは、赦しを得るためではないんです。そうではなくて癒されるためです。いつまでも罪に苛さいな
まれることなく、罪責感に苦しめられることなく、罪の告白はそういう状態からあなたを解放するんです。
このことはヤコブ 5 : 16 に書いてあります。罪の告白はあくまで癒されるため、罪責感から罪悪感から解
放されるため。赦されるためではありません。赦しはキリストの血潮によってなされること。ヤコブ 5 :
16 によれば『ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるた
めです。(とあります。赦されるためとは書いてありません。いやされるため。) 義人の祈りは働くと、大
きな力があります。』「罪から本当に解放されたんだ。私のすべての罪は、過去の罪も、今犯している罪も、
これから犯してしまうであろうすべての罪はキリストの血潮によって本当に洗いきよめられたんだ。私は
主の前で義と認められたんだ。キリストのうちにあって、私は1点の曇りもない、陰もない、光の子供と
されたのだ。」赦しの確信を持てるんです。「赦されているかどうか分からない。あの罪だけは赦されてい
ないのかもしれない。私は救いを失うのかもしれない。」そういう恐れから、不安から、そういう陰から、
あなたは解放されるんです。罪を告白することによってです。赦しの根拠ではありませんから、誤解しな
いで下さい。罪の告白がなければ一生残ったままというわけじゃないです。逆に言えばあなたは意識してないうちにも沢山の罪を犯していますから、本当ところは告白しようがないんです。無意識に
犯した罪も赦して下さいと言うしかないわけです。具体的に何の罪を犯したか、あなたは思い起こすこと

すら出来ないわけです。脳も老化していくわけですから、過去の記憶もだんだん薄らおぼろげになって、都合のいいような記憶しか残っていかないわけですから、罪の記憶、あなたにとって都合の悪い記憶は、どんどん記憶の彼方へと押しやられていってしまうわけです。ですから、そんな罪の告白に神の赦しがベースを置いているんじゃないんです。神の赦しのベースは、キリストの血潮に置かれているということ。このことを正しく理解しなくてははいけません。そうではないと、この聖句は一人歩きされて、文脈から外されて、誤解され、曲解されてしまいます。

で、話を戻したいと思いますけれども、最後にその続きの **10 節**も読みたいと思いますが『もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。』最後のまとめとしまして、私たちは皆、御父と御子との交わりを持ち、すなわち御言葉のうちにイエス・キリストを見出すような学びをし、そしてまた聖餐式のうちに、パンを裂く時に本当にキリストが見えるようだというようなレベルの聖餐式を守り、それらを継続して行っているならば、必ずその人のうちには全き喜びが、満ち溢れる喜びが、必ず確認出来るはずで、その人は喜びに満ち溢れたクリスチャンとなっているはずであります。究極の模範は、私たちと同じ姿をとってこの世に来られた、受肉された神、受肉されたことばであるイエス・キリストであります。「でも、そう言われても、イエス・キリストは悲しみの人だと言われていなかったでしょうか。イザヤ 53 章にイエスは悲しみの人だと、そう書いてあるじゃないですか。喜びの人とは書いてありません。むしろ悲しみの人だと言われているじゃないですか。」その通りです。それは勿論否定しません。ただ、イエスが悲しまれる時、またはイエスが泣かれた時、涙流された時、それはどういう時だったのか。誰のためだったか、思い出して下さい。イエスは決して自分のことで悲しんだり、自分のことで泣くことは、絶対に 1 回もありませんでした。むしろイエスが悲しまれた時、涙を流された時は、他者のためでした。エルサレムの街を見て号泣したんです。エルサレムがイエスを自分の王として、メシアとして拒否することが分かったからです。またイエスはラザロの墓で泣きました。常に他者のためです。自分のことで悲しんだり、嘆いたり、泣くということはありませんでした。自己憐憫で嘆く、泣く。そういう悲しみの人ではないんです。そうであったならばイエスは暗闇の中を歩んだこととなります。でも、イエスは神でしたから少しも暗いところがなかったわけです。誤解しないで下さい。イエスの悲しみは、イエスの涙は、他者のためであった。この中であなたも悲しんでいるかもしれませんが、他者のために。泣くこともあると思います、滅び行く魂のために。その悲しみは ok です。それは光の中にあるイエスもまた悲しまれた事柄であり、涙流された事柄です。泣くならば、あなたの涙は他者のために使って下さい。自分のために虚しく使わないで下さい。それは暗闇に浪費することになります。むしろイエスは喜びの人でありました。ヘブル 1 : 8~9 にはこう書いてあります。『**御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。(『神よ。』と言っているのは、勿論御子イエスに対してです。御子イエスは神です。)** **あなたは義を愛し、不正を憎まれます。(イエスは義を愛し、不正を憎まれる。罪を憎まれる方。)** **それゆえ、神よ。(イエスよ。)** **あなたの神は (父なる神は)、あふれるばかりの喜びの油を、あなたとともに立つ者にまして、あなたに注ぎなさいました。』**」イエスは義を愛し、不正を憎んだので、父なる神によってあふれるばかりの喜びの油を、誰にも増して、歴史上のどんな人物よりも増して与えられた。要するにイエスは歴史上最も喜びに満ちた人物であったということです。イエス以上に喜びにあふれた人は、存在しないということを言っているわけです。イエスはむしろ喜びの人だった。なぜならばイエスは御父の交わりを持ち、御父と同じように義を愛し、不正を憎んだからです。光の中を歩んだからです。十字架につけられる時ですら、目の前に置かれた喜びを見ていました。ヘブル 12 : 2 に書いてあります。苦しい時にも喜びが見出せたわけです。「でも、イエスはゲッセマネの園では、悲しみのあまり死ぬほどの思いをされたのではありませんか。『父よ、できま

すならば、この杯を私から過ぎ去らせてください。』と三度も祈ったじゃないですか。あれはなんですか。どう説明するんですか。喜びの人とはとても思えません。」イエスは確かに悲しみのあまり、そして極度に恐れたことがあって、三度も同じ祈りを祈りました。その祈りとは、その恐れとは何なのか。その杯と呼ばれているのは一体何なのか。それは、死が怖かった、十字架刑が怖かったから、ではありません。それらを恐れたのではなくて、十字架に掛かるということは、罪のない方が罪を負って罪そのものとなる。すなわち罪によって父なる神様との関係が、一瞬ではありますけれども、一時ではあっても、数時間ではあっても絶たれてしまう。神との交わりが絶たれてしまう。神との交わりをわずかな時間でも失うことが最も恐ろしいことだったんです。だからイエスの肉体には極度のストレスがかかって、いわゆる血汗症という症状が生じたわけです。血の汗の症状、血汗症。極度のストレス、恐れによって毛細血管が破れて汗腺から、汗が吹き出すところから血が出てくるんです。血の汗をかいたんです。血の涙を流したんです。十字架刑が怖かったからじゃありません。罪を負うことで父なる神様とこれまで1度も絶やすことのなかった交わりが、一瞬ではありますが失われてしまう。それが怖かったんです。それが恐ろしかったんです。それがあまりにも辛くて、悲しかったんです。それがイエスの体験された悲しみです。それがイエスの流された血の涙、血の汗なんです。神と交わりを失うこと、たった数時間でも神と引き離されることが、それほど悲しい、それほど辛い、それほど恐ろしい。

あなたはどうでしょうか。あなたは今何を恐れているのでしょうか。体重が1キロ増えること、シワが、しみが増えること、それが今のあなたの最大の恐れでしょうか。病気になること、死ぬことが恐れでしょうか。愛する者を失うことがあなたの最大の恐れでしょうか。一文無しになってしまうこと、破産することが、あなたが今一番恐れていることでしょうか。仕事をクビになること、それが今あなたが一番恐れていることでしょうか。それらの恐れは全て間違いです。間違っただけのものに対する恐れです。本来私たちクリスチャンは、キリストに倣って神と交わりが絶たれてしまうこと、神との交わりを失ってしまうことが一番恐れる、一番怖いこと、一番辛い悲しいことでなければならないということです。私たちはあまりにも間違っただけのことに対する恐れや悲しみを抱きすぎているのではないかと思います。是非そういった間違っただけの恐れを抱いていたならば、それもまた的外れな罪ですから言い表して下さい。

“言い表す”とは、「ホモロゲオ」"homologeō"というギリシャ語で、文字通りは「同じことを言う。」ことです。“罪を告白すること”、“言い表すこと”というのは、本来は懺悔ざんげという意味ではなくて、同じことを言うこと。同じことというのは、聖書で神様が罪だと言っているそれについてあなたは同意し、賛同して、そのことを主に認めた上で、告白するという。ただあれをした、これをした、ということを暴露することが、言い表すこと、告白することだと思ったら大間違いです。そうではなくて「**今私がやっているこの行為について聖書は、神はこう言っている。それについて私も賛同します。あなたが罪と言うならばそれは罪です。で、その罪は必ず死をもたらす。これも事実です、真理です。それに対してアーメンと言うこと。はかない楽しみ、それを認めて、そして罪は必ず刈り取ることになる。それも同意して、認めて。このままでは私の罪が私を見つけだし、私の悪が私を懲らしめ、私の背信が私を苦しめることになる。それを私も認めます。聖書に書かれている通り、神様あなたが言われている通り私も同じことを言います。**」これが聖書的な罪の告白であります。

中には「罪人呼ばわりされる筋合いはありません。失敬だ。あなたはこの私を罪人呼ばわりするつもりか。」その通りです。私も同じことを言います。「ホモロゲオ」したいわけです。全ての人は、罪を犯したので罪人なんです。全ての人は生まれながらに罪人です。『義人はいない。ひとりもない。』これが神の言っていることです。だから私はあなたを罪人呼ばわりします。私は皆さんのことを愛していますけれども、でも神が言われることを曲げるつもりはありません。私もあなたも皆、罪人です。あなたはそれで傷つくかもしれませんが、ショックを受けるかもしれませんが、でも、それは神の言われていることなので、私

も同じことを言わなければいけません。心理学は「あなたは悪くない。あなたは全然悪くない。悪いのはあなたの恐れていた環境である、社会である、親である、学校である、先生である、あなたをいじめた友だちである。そんな罪人なんて、自分のセルフイメージをそんな低く持つてはいけない。低セルフイメージはいけない、不健康になる。もっとセルフイメージを高く見なければいけない。セルフ・エスティームが重要だ。」と、学校教育の現場でも子供たちにそのような間違っただけの教を植え込みます。「あなたは悪くない。悪いのは、あなたの手だ。悪いのは、あなたの肉体だ。」これはグノーシス主義であります。真実はそうではありません。すべての人は罪人であります。私たちはその事を認めた上で、キリスト血潮にすがります。低セルフイメージなんていうものは、心理学の言葉ですけども、でもキリスト教において、聖書においてセルフイメージなんていうものは、高いも低いもないんです。セルフイメージなんていうものは、そもそも持つてはいけないんです。私たちのセルフイメージは罪です。でも、私たちはキリストイメージに変えられるということ。神のかたちに似せて造られたのが私たちです。神のかたちに低いも高いもないわけです。心理学は神を認めませんから、セルフイメージに低い高いを設けて、「高いイメージを持つ人がポジティブで、積極的で、くよくよしない。いつも明るく振る舞える。鬱にならない。」とんでもない話であります。学力が向上するとか、とんでもない話であります。そうではなくて本来は、私たちは神のかたち、キリストのイメージにかたち造られたものですから、それを持つことによって私たちは喜べるんです。それを持つことによって罪を克服できます。私たちはそのキリストに似るように努めて生きていくわけです。そのためには常に神の言葉に耳を傾け、同意して、そして言い表す、告白するということによって、常に癒しを受けて、解放を受けて、またもう一度光の中に留まって、歩み直す。そのことが神の御心であって、ヨハネが当時の教会に求めていたことでもあります。私たちもそのことを今主から求められているというふうに、しっかりと個人的に真摯に受け止めていただいて、今日はこれで終わりますけれども、引き続き神の光を経験するという事。神学的に知るんじゃなくて、経験的に知るという事を **2章**以降も学んでいきたいと思えます。必ず実体験には素晴らしい祝福が伴います。頭の知識が増えてもあなたの人格は何の変化もいたしません。逆に鼻高々に「私は聖書を勉強しています。」知識は人を高ぶらせるだけです。あなたの人格はますます悪くなる、歪んだものとなります。でも、それが経験的な知識、すなわち心の知識になるならば、あなたはますますキリストの似姿に変えられていきます。あなたのようになりたいという人たちが、きっとあなたの周りにも起こされていくはずで。「あなたの行っている教会に私も行ってみたい。」そう言われたら表彰ものです。実際に表彰して頂けるんです。かの日には、キリストと顔と顔を合わせるその日には、あなたは「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と言って頂けます。ですから、是非その日を楽しみにしながら、神の光を体験することを求めて、目指して、この学びを続けていきたいと思えます。